

情報工学科 講義 ディジタル信号処理A (2025/04/24)

# 第3回 ラプラス変換から $z$ 変換へ

情報工学科 准教授 高道 慎之介

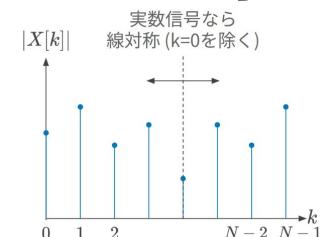
# ディジタル信号処理Aの授業予定 (仮)

第XX回	日付	内容 (順次変わっていくので予想)	応用数学の復習
第01回	2025/04/10	イントロダクション, デジタル信号処理	
第02回	2025/04/17	フーリエ級数展開・フーリエ変換から離散フーリエ変換へ	
<b>第03回</b>	<b>2025/04/24</b>	<b>ラプラス変換から z 変換へ</b>	
第04回	2025/05/01	インパルス応答と伝達関数, 安定性	
第05回	2025/05/08	デジタルフィルタ	昨年のBの途中まで
第06回	2025/05/15	高速フーリエ変換と短時間フーリエ変換	
第07回	2025/05/22	総合演習. 期末試験の練習としての立ち位置.	
期末試験	2025/06/??	(日程は後日アナウンス)	

# 前回の課題の解答

以下の課題についてレポートを作成し,  
LMS 上で提出せよ。

- 周期関数  $x(t)$  のフーリエ級数  $c_k$  と  $c_{-k}$  は複素共役であることを示せ
- フーリエ変換の時間シフトを証明せよ
- サンプリング周波数を 4000 Hz とする。離散フーリエ変換の周波数解像度 ( $k$  と  $k - 1$  の周波数軸上の間隔) を 20 Hz としたい。そのときに、必要な信号時間長  $T$  を答えよ
- 離散フーリエ変換は行列として表現することができる。この行列を Python で記述せよ。詳細は次のページ



# 周期関数 $x(t)$ のフーリエ級数 $c_k$ と $c_{-k}$ は複素共役であることを示せ

---

- $c_k$  の項と  $c_{-k}$  の項の和を考える

$$x(t) = \sum_{k=-\infty}^{\infty} c_k \exp\left(j \frac{2\pi k t}{T}\right)$$

- 和は以下の通り。(他の項は直交するので無視してよい)

$$(a_k + jb_k)e^{j \frac{2\pi k t}{T}} + (a_{-k} + jb_{-k})e^{j \frac{-2\pi k t}{T}}$$

- $x(t)$  は実数関数なので、その虚部は 0 になる

$$b_k \cos\left(\frac{2\pi k t}{T}\right) + a_k \sin\left(\frac{2\pi k t}{T}\right) + b_{-k} \cos\left(\frac{2\pi k t}{T}\right) - a_{-k} \sin\left(\frac{2\pi k t}{T}\right)$$

- これが成立するには、 $a_k = a_{-k}$ ,  $b_{-k} = -b_k$  (複素共役)

- 別解： $c_k$  の定義から。 $x(t)$  が実数関数なので成り立つ

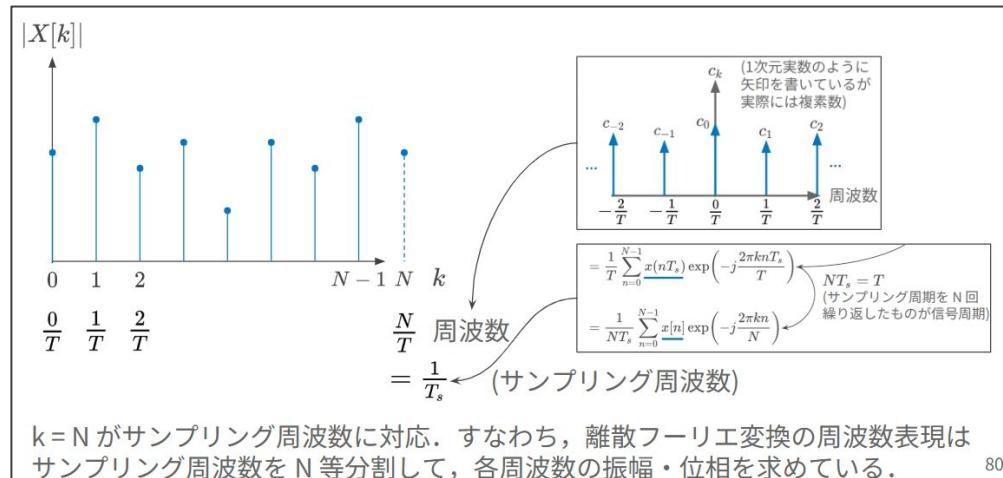
$$c_k = \frac{1}{T} \int_{-T/2}^{T/2} x(t) \exp\left(-j \frac{2\pi k t}{T}\right) dt \quad c_{-k} = \frac{1}{T} \int_{-T/2}^{T/2} x(t) \exp\left(j \frac{2\pi k t}{T}\right) dt = \left( \frac{1}{T} \int_{-T/2}^{T/2} x(t) \exp\left(j \frac{-2\pi k t}{T}\right) dt \right)^* = c_k^*$$

# フーリエ変換の時間シフトを証明せよ

---

- $\tau = t - a$  として積分の変数変換すれば解ける。

サンプリング周波数を 4000 Hz とする。離散フーリエ変換の周波数解像度 (k と k - 1 の周波数軸上の間隔) を 20 Hz としたい。  
そのときに、必要な信号時間長 T を答えよ



$k=N$  がサンプリング周波数に対応。すなわち、離散フーリエ変換の周波数表現はサンプリング周波数を N 等分割して、各周波数の振幅・位相を求めている。

80

- サンプリング周波数  $1/T_s = 4000 \text{ Hz}$ , 周波数間隔  $20 \text{ Hz}$
- $N = 4000 / 20 = 200$ ,  $T = 200 / 4000 = 0.05 \text{ [sec]}$
- 別解：周波数解像度の逆数が信号時間長  $1/20 = 0.05 \text{ [sec]}$

離散フーリエ変換は行列として表現することができる。  
この行列を Python で記述せよ。

---

```
import numpy as np

def DFT_matrix(N):
    W = np.zeros((N,N), dtype=complex) # N-by-N zero matrix
    """
    Generate DFT matrix of size N.
    """
    for n in range(N):
        for k in range(N):
            W[n][k] = np.exp(- 2j * np.pi * n * k / N)
    return W

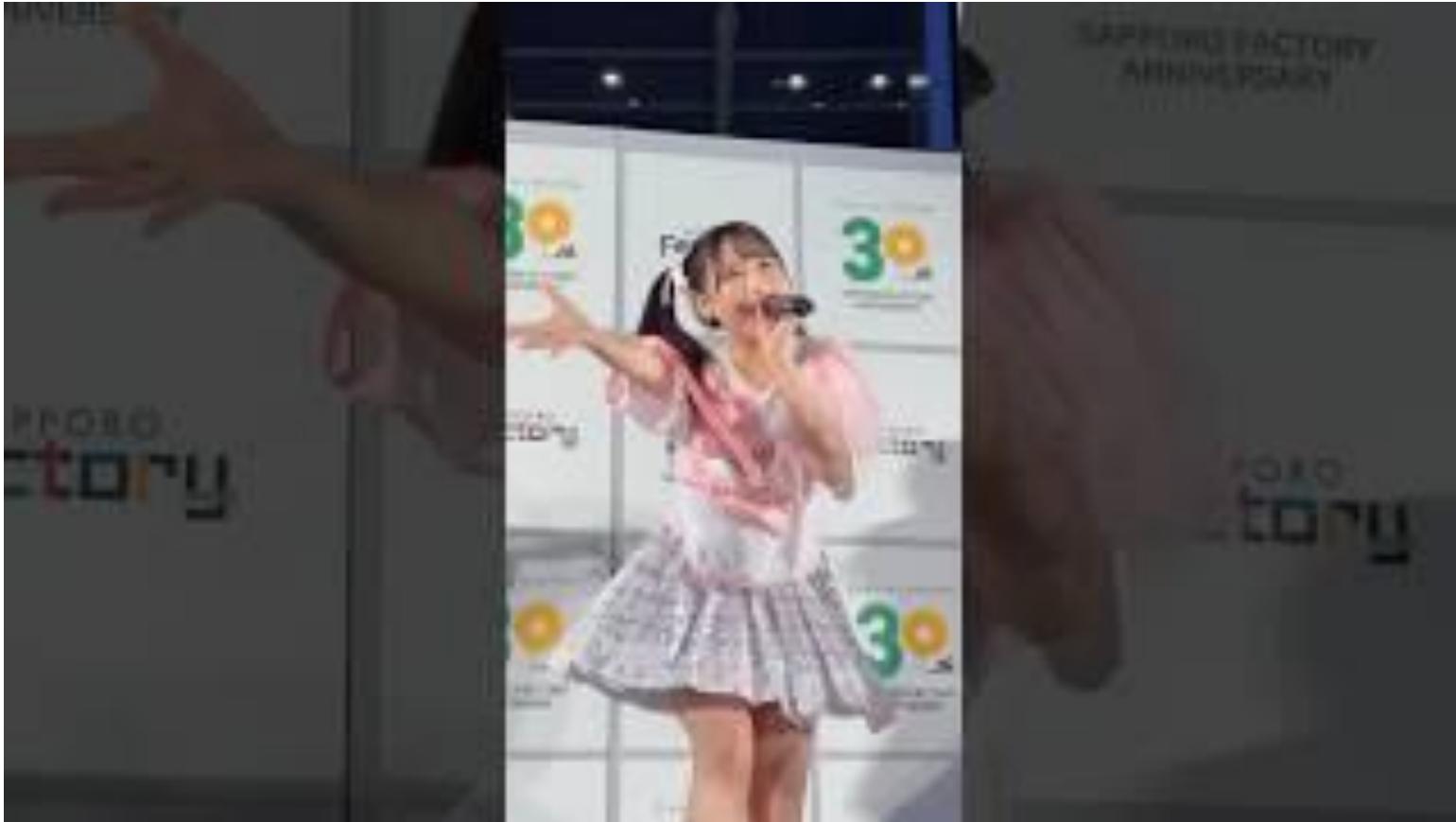
xn = np.array([1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8]) # input signal
W = DFT_matrix(len(xn))

# check
print("your answer:\n", W @ xn) # Xk = W xn
print("numpy:\n", np.fft.fft(xn)) # reference. OK if your answer matches to this.
```

(「python で多重ループを書くな」という話はあります  
が簡単のために)

# 本日の内容

# ハウリング：時間とともに信号が増幅する現象



# 本日の内容

---

- ラプラス変換
- z 変換

ラプラス変換，z 変換，フーリエ変換との関係を理解しよう。  
これまでにやった ”周波数” を拡張します。

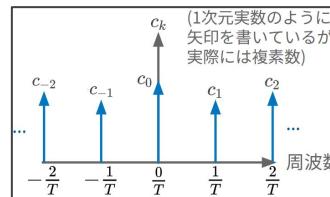
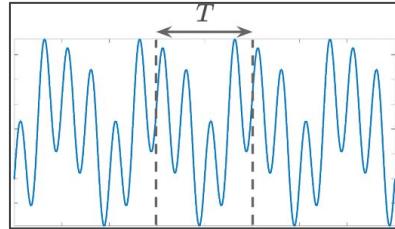
# 復習：フーリエ変換

# 手法の比較

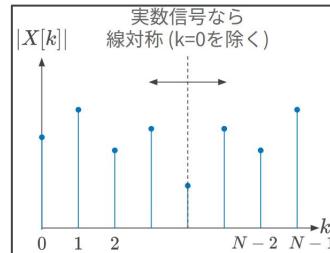
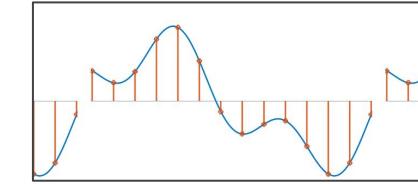
連続時間信号

## フーリエ級数展開

周期連続時間信号 → 離散周波数



離散時間信号



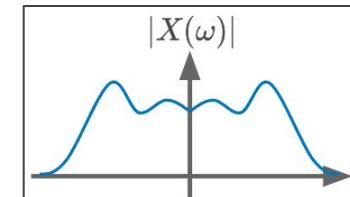
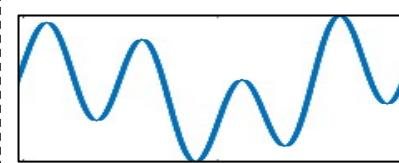
## 離散フーリエ変換

周期離散時間信号 → 周期離散周波数

離散周波数 (信号の周期性を仮定)

## フーリエ変換

非周期連続時間信号 → 連続周波数



本講義ではやりません。  
興味があれば調べてください。

## 離散時間フーリエ変換

非周期離散信号 → 連続周波数

連続周波数 (信号は非周期で良い)

# フーリエ変換 とその逆変換 ( $\omega$ は角周波数, $2\pi \times$ 周波数)

- Fourier 変換 : 連続時間信号  $\rightarrow$  連続周波数

$$X(\omega) = \int_{-\infty}^{\infty} x(t) \exp(-j\omega t) dt \quad \mathcal{F}[x(t)] = X(\omega)$$

- 逆Fourier 変換 : 連続周波数  $\rightarrow$  連続時間信号

$$x(t) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} X(\omega) \exp(j\omega t) d\omega \quad \mathcal{F}^{-1}[X(\omega)] = x(t)$$

# 離散フーリエ変換とその逆変換

- 離散 Fourier 変換：離散時間信号 → 離散周波数

$$X[k] = \sum_{n=0}^{N-1} x[n] \exp\left(-j\frac{2\pi kn}{N}\right)$$

$$(k \in \{0, 1, \dots, N-1\})$$

DFT  $[x[n]] = X[k]$

- 逆離散 Fourier 変換：離散周波数 → 離散時間信号

$$x[n] = \frac{1}{N} \sum_{k=0}^{N-1} X[k] \exp\left(j\frac{2\pi kn}{N}\right)$$

$$(n \in \{0, 1, \dots, N-1\})$$

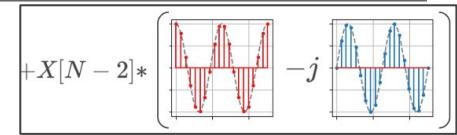
DFT<sup>-1</sup>  $[X[k]] = x[n]$

# 振幅スペクトル $|X[k]|$ と位相スペクトル $\arg(X[k])$

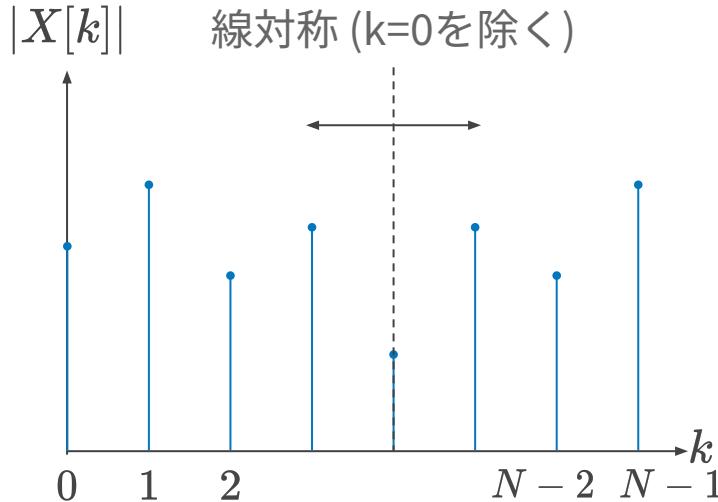
$$X[k] = |X[k]| e^{j \arg(X[k])}$$

$\exp\left(j\frac{2\pi kn}{N}\right)$  の大きさを  
何倍するか

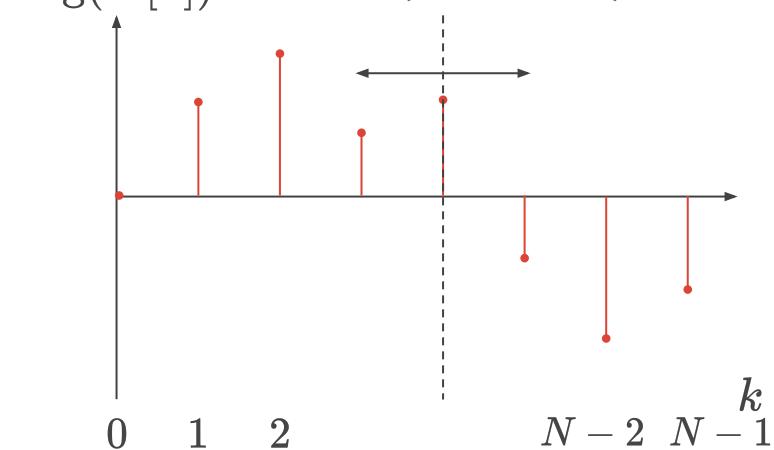
$\exp\left(j\frac{2\pi kn}{N}\right)$  の開始時刻を  
どれくらい動かすか



実数信号なら  
線対称 ( $k=0$ を除く)



実数信号なら  
点対称 ( $k=0$ を除く)

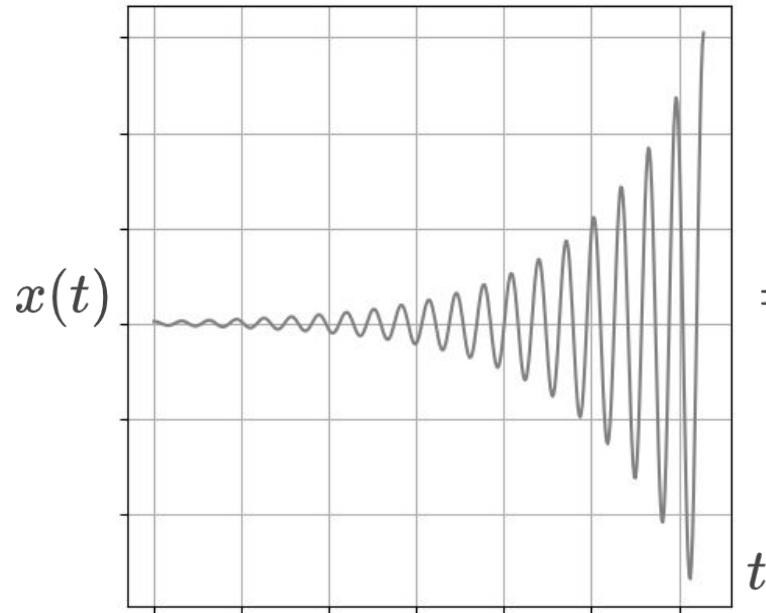


実数信号を離散フーリエ変換する場合には  $N-1$  の半分まででよい (図示する場合もそう)

# ラプラス変換 (Laplace transformation)

# フーリエ変換は全ての信号を変換できるわけではない

ハウリングのように  
時間とともに無限大に増大する信号



$$= \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} X(\omega) \exp(j\omega t) d\omega$$

全ての基底波の  
足し合わせ

基底波  
( $\cos$  波と  $\sin$  波)

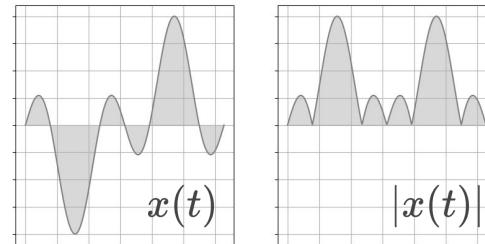
振幅(大きさ)と  
位相(時間遅れ)

$|X(\omega)|$  が有限の値である限り、無限大に増大する信号を、基底波の足し合わせで表すことはできない

# フーリエ変換できるのは絶対可積分関数のみ

- 関数  $x(t)$  が絶対可積分であるとは、絶対値の積分値が上に有界

$$\int_{-\infty}^{\infty} |x(t)| dt < \infty$$

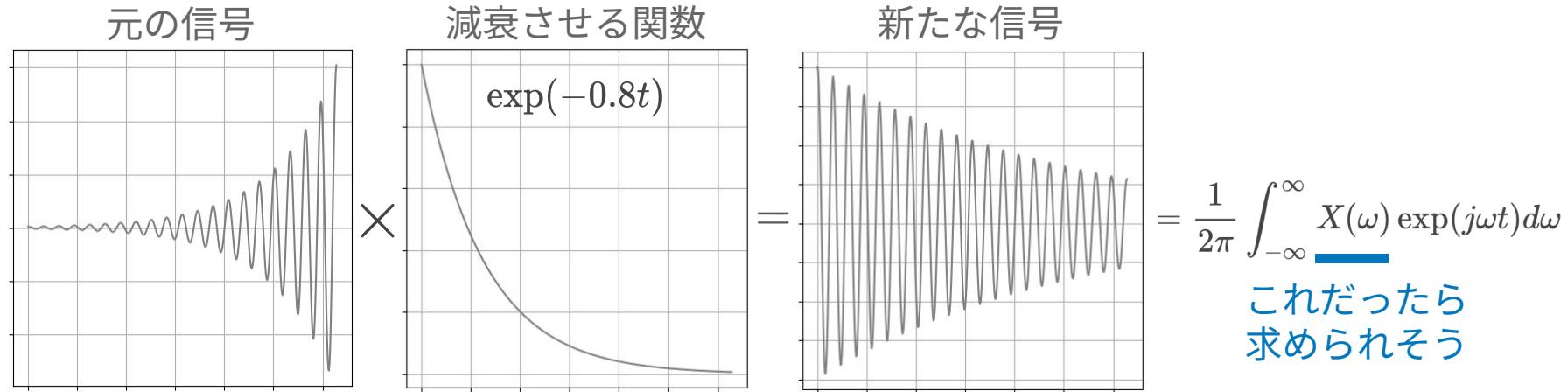


- 絶対可積分関数なら、フーリエ変換は上に有界（有限の値になる）

$$\begin{aligned}|X(\omega)| &= \left| \int_{-\infty}^{\infty} x(t) \exp(-j\omega t) dt \right| \\&\leq \int_{-\infty}^{\infty} |x(t) \exp(-j\omega t)| dt \\&= \int_{-\infty}^{\infty} |x(t)| dt \\&< \infty\end{aligned}$$

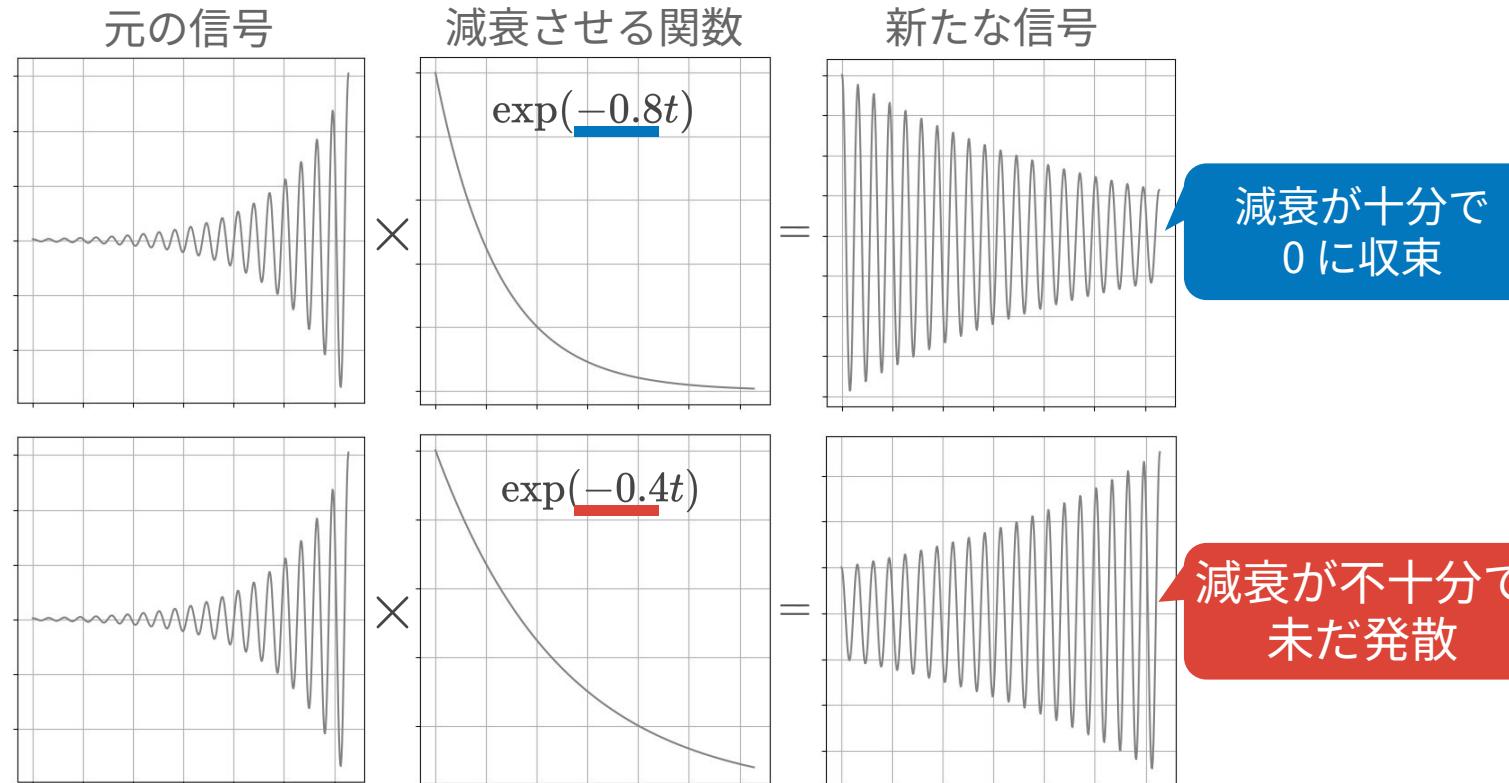
積分の絶対値は、絶対値の積分以下  
exp項の大きさは 1  
絶対可積分の条件

# じゃあどうする？： 時間とともに減衰させる関数を乗算すればよい



時間とともに減衰させることで、変換可能な信号になりそう

# さらにイメージしてみよう： 減衰の強さで信号の増減が分かる



関数の減衰パラメータの大小で、元の信号の増減具合を分析できそう

# ラプラス変換の定義

- ラプラス変換：連続時間信号 → 複素周波数

複素数

$$X(s) = \int_0^{\infty} x(t)e^{-st} dt$$

複素数  $s = \sigma + j\omega$

$$\mathcal{L}[x(t)] = X(s)$$

負の時刻で発散しないよう正の時刻のみを扱う

- 逆ラプラス変換：複素周波数 → 連続時間信号

$$x(t) = \frac{1}{2\pi j} \int_{\sigma-j\infty}^{\sigma+j\infty} X(s) \exp(st) ds$$

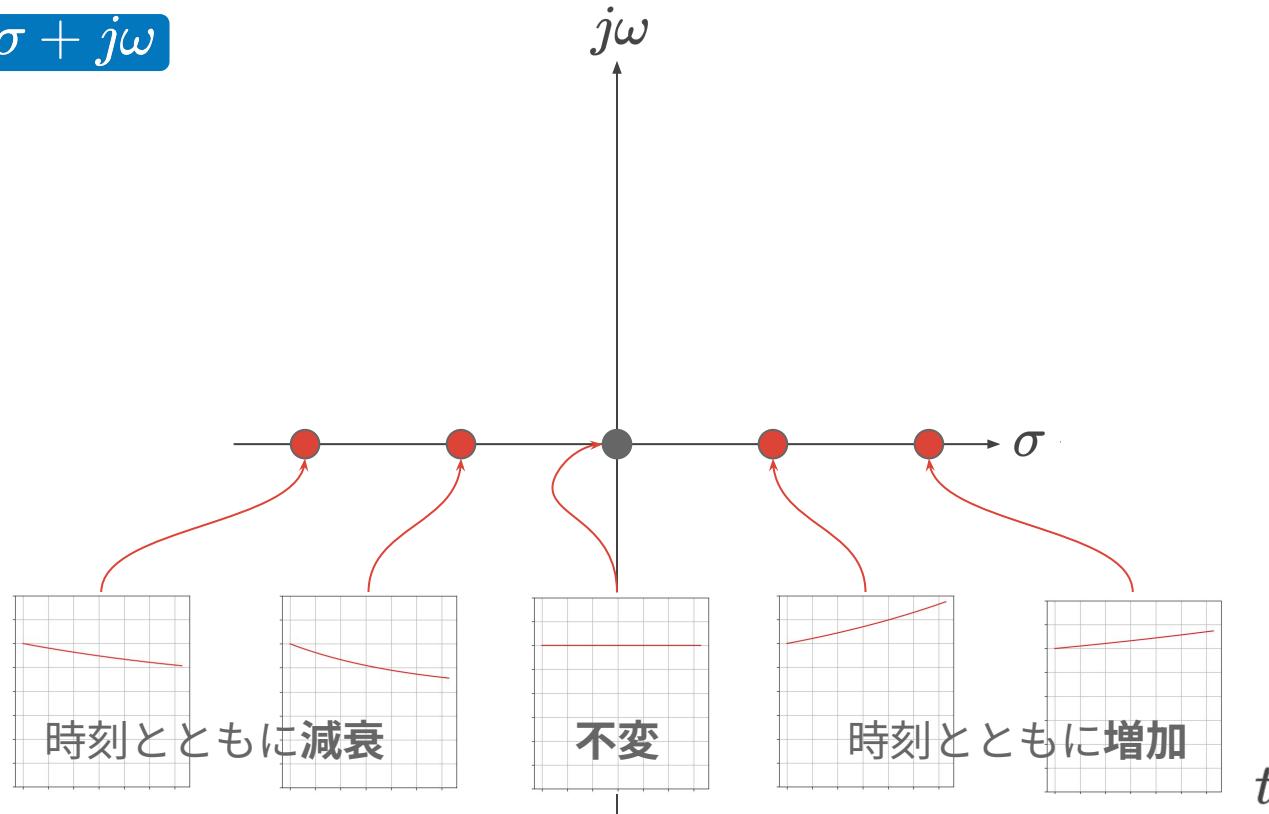
$$\mathcal{L}^{-1}[X(s)] = x(t)$$

端的に言うなら…

- ラプラス変換は、時間減衰関数を導入することで、フーリエ変換できなかった信号も変換できるようにしたもの
- フーリエ変換で使われる振動だけでなく、信号の増減も表せるもの
- 減衰関数の強さで信号の増減を解析できるもの

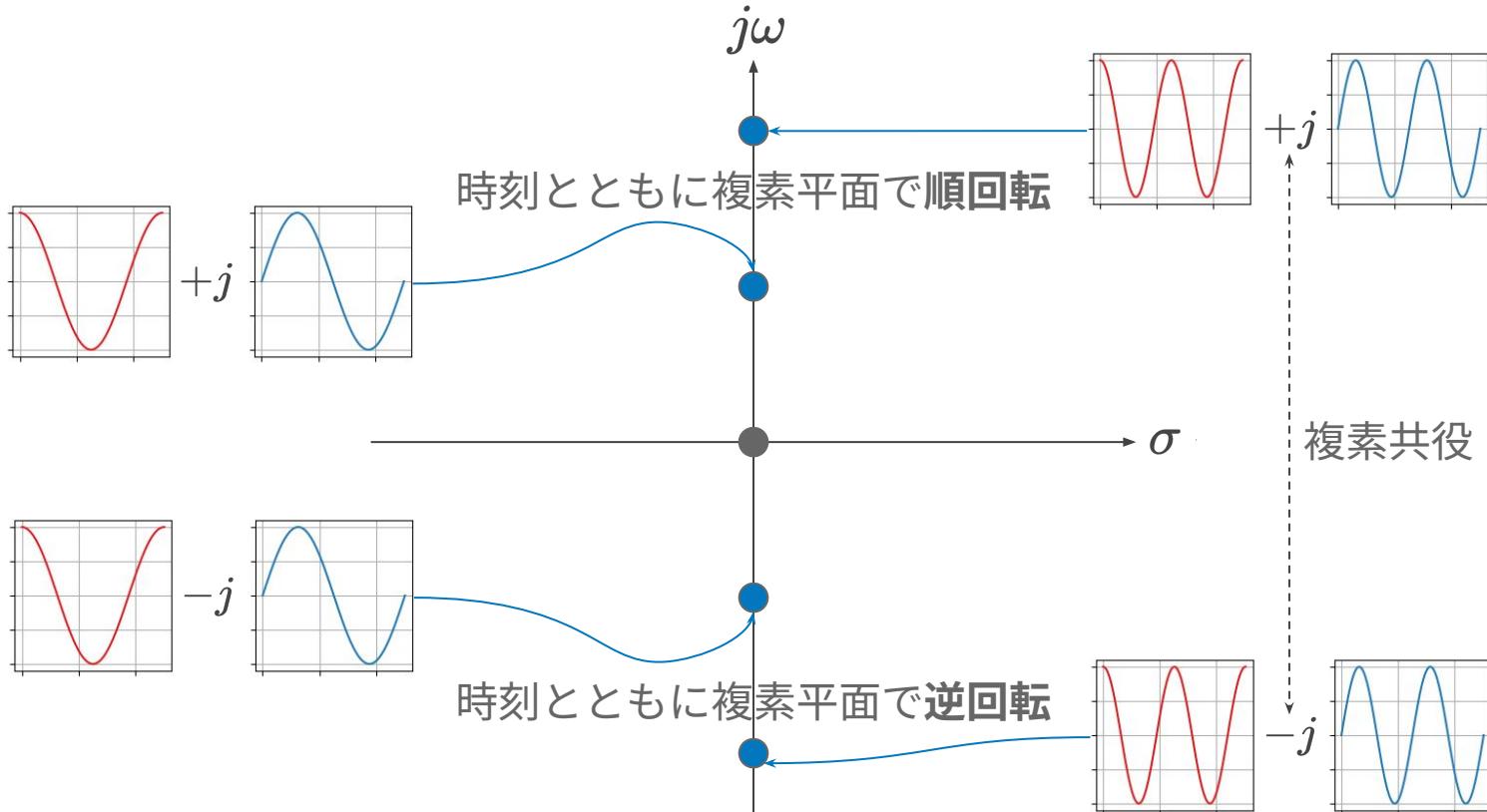
# “複素”周波数の意味するところ (s 平面)

複素数  $s = \sigma + j\omega$



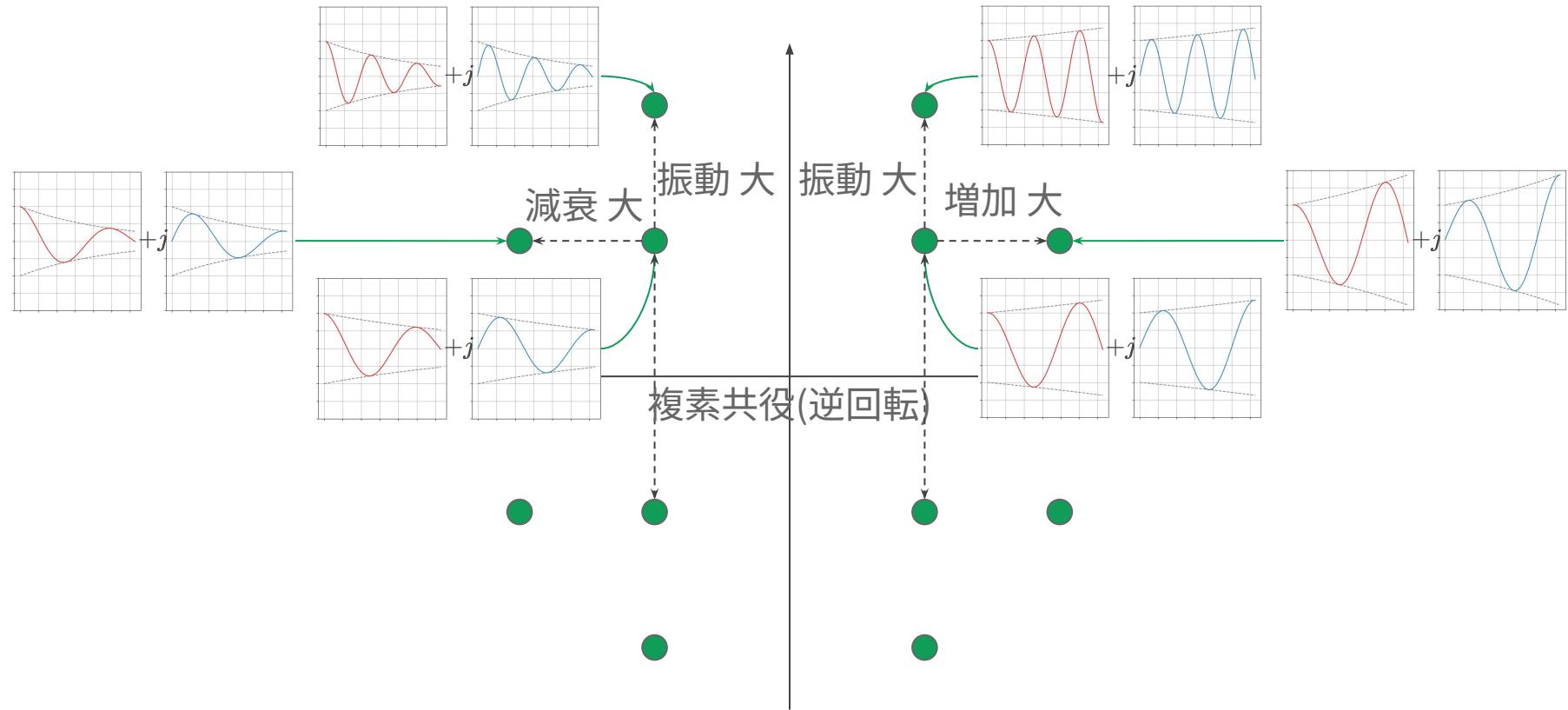
s 平面の実軸は時刻とともに {増加, 不変, 減衰} する実指数関数を表す.

# “複素”周波数の意味するところ (s 平面)



s 平面の虚軸は時刻とともに {順回転, 逆回転}する複素指数関数を表す。

# “複素”周波数の意味するところ (s 平面)



# ラプラス変換してみよう

- ステップ関数

$$x(t) = \{1 (t > 0), 0 (t \leq 0)\} \xrightarrow{\text{基本形は } 1/s} \mathcal{L}[x(t)] = \int_0^{\infty} 1 \cdot e^{-st} dt = \left[ \frac{e^{-st}}{-s} \right]_0^{\infty} = \frac{1}{s}$$

- 指数関数 ( $a > 0$ ) 減衰項で左にシフト

$$x(t) = e^{-at} \xrightarrow{\text{(増加項で右)}} \mathcal{L}[x(t)] = \int_0^{\infty} e^{-at} \cdot e^{-st} dt = \left[ \frac{e^{-(a+s)t}}{-(a+s)} \right]_0^{\infty} = \frac{1}{s+a}$$

- 正弦波関数 ( $\omega_0 > 0$ )

振動項で

上下にシフト

$$x(t) = \sin(\omega_0 t) \xrightarrow{\mathcal{L}[x(t)] = \mathcal{L}\left[\frac{1}{2j}(e^{j\omega_0 t} - e^{-j\omega_0 t})\right]} = \frac{1}{2j} \left( \frac{1}{s - j\omega_0} - \frac{1}{s + j\omega_0} \right) = \frac{\omega_0}{s^2 + \omega_0^2}$$

- 指数関数×正弦波関数

左にシフト &

上下にシフト

$$x(t) = e^{-at} \sin(\omega_0 t) \xrightarrow{\mathcal{L}[x(t)] = \mathcal{L}\left[\frac{e^{-at}}{2j}(e^{j\omega_0 t} - e^{-j\omega_0 t})\right]} = \frac{\omega_0}{(s + a)^2 + \omega_0^2}$$

# $X(s)$ を可視化してみよう (Google colab版)

```
# try on Google Colab or Jupyter Notebook
# from IPython.display import display
import sympy as sp # for symbolic calculation
import numpy as np
import plotly.graph_objects as go # for dynamic drawing
sp.init_printing()

# define symbols, signal, and calculate Laplace transformation
s, t = sp.symbols("s t")
x = sp.exp(-0 * t)
X = sp.laplace_transform(x, t, s, noconds=True)

# print symbols
for message, variable in zip(["x(t)", "L[x(t)]"], [x, X]):
    print(message, "=")
    display(variable)

# convert it to a numerical function for plotting.
X_func = sp.lambdify(s, X, 'numpy')

# create a grid of s values (complex numbers)
real_s, imag_s = np.linspace(-0, 3, 50), np.linspace(-3, 3, 50)
real_s, imag_s = np.meshgrid(real_s, imag_s)
s_vals = real_s + 1j * imag_s

# evaluate the Laplace transform for the complex values of s
X_vals = X_func(s_vals)

# Extract real and imaginary parts
real_X, imag_X = np.real(X_vals), np.imag(X_vals)
```

```
# plot real part
fig = go.Figure(data=[go.Surface(
    z=real_X, x=real_s, y=imag_s, hidesurface=True,
    contours=dict(
        x=dict(show=True, color="red", start=-0, end=3, size=0.25),
        y=dict(show=True, color="red", start=-3, end=3, size=0.25),
    ))])

fig.update_layout(
    scene=dict(xaxis_title='Re(s)', yaxis_title='Im(s)',
               zaxis_title='Re[X(s)]',
               width=None, height=None, autosize=True,
               )
)
# fig.show()

# plot imag part
# fig = go.Figure(data=[go.Surface(
#     z=imag_X, x=real_s, y=imag_s, hidesurface=True,
#     contours=dict(
#         x=dict(show=True, color="blue", start=-0, end=3, size=0.25),
#         y=dict(show=True, color="blue", start=-3, end=3, size=0.25),
#     ))])

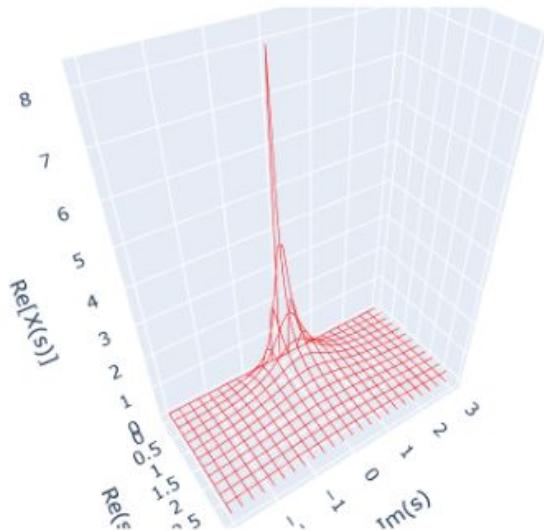
# fig.update_layout(
#     scene=dict(xaxis_title='Re(s)', yaxis_title='Im(s)',
#                zaxis_title='Im[X(s)]',
#                width=None, height=None, autosize=True,
#                )
# )
```

# $X(s)$ を可視化してみよう

$$\begin{aligned}x(t) &= \\1 &\\L[x(t)] &= \\ \frac{1}{s}\end{aligned}$$

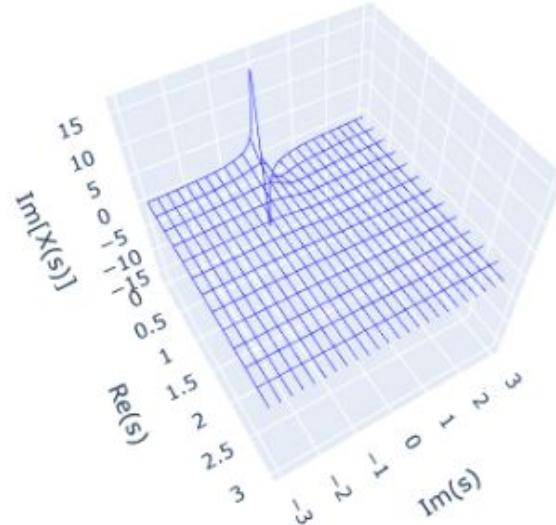
sympy はラプラス変換を  
代数的に解いて  
くれるので便利  
(↑はステップ関数)

$X(s)$  実部



実軸で線対称

$X(s)$  虚部



実軸で点対称

ラプラス変換もフーリエ変換と同様の対称性を持つ。  
(実数関数を変換するとき,  
虚数部をキャンセルしなければならぬため複素共役になる)

# 演習 (残りは課題)

---

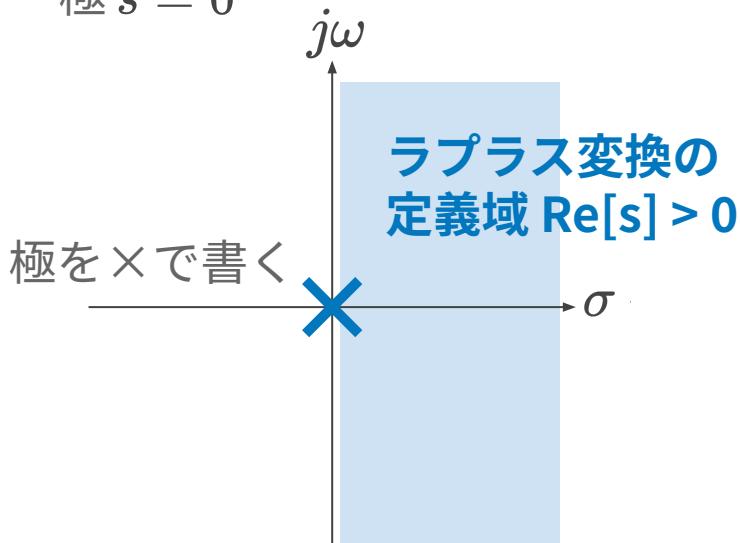
- 以下の関数について  $X(s)$  の実部・虚部をプロットし、その形状を比較
  - 考察せよ。 $a, \omega_0$  には適当な値を使用せよ。
    - ステップ関数 ← 前のページのやつ
    - 指数関数 ( $a > 0$ )
    - 正弦波関数 ( $\omega_0 > 0$ )
- `sympy` の関数
  - `numpy` と同じように定義されているケースが多い
  - `sp.exp(), sp.sin(), sp.pi`
- プロットする  $s$  の範囲を適宜変更せよ。

# 極と定義域(収束域)について

- $X(s)$  が無限となる時の  $s$  を**極(pole)** と呼ぶ

$$x(t) = 1 \longrightarrow \mathcal{L}[x(t)] = \frac{1}{s}$$

極  $s = 0$

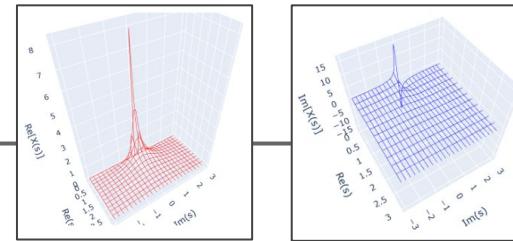


$$x(t) = \sin(\omega_0 t) \longrightarrow \mathcal{L}[x(t)] = \frac{\omega_0}{s^2 + \omega_0^2}$$

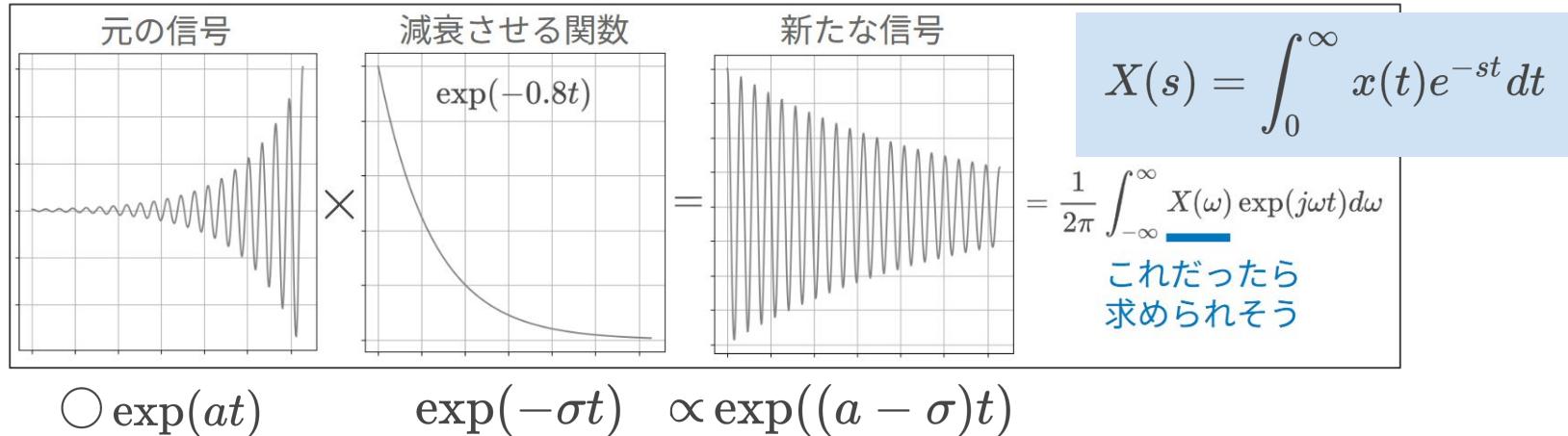
極  $s = \pm\omega_0$



極の右側がラプラス変換の定義域になる。すなわち、ラプラス変換が有限の値として存在する  $s$  の範囲のこと。複数の極があるときは、一番右側の極の右側。



# 定義域(収束域)の直感的な説明



新たな信号が絶対可積分になるために：

- $a - \sigma < 0, \rightarrow a < \sigma$  であれば,  $t$  の増加とともに 0 に収束する.
- すなわち, 極の実部の右側が収束域になる.
  - 元の信号が時間とともに減少 ( $\circ \exp(-at)$ ) であれば,  
 $-a < \sigma$  となり非負の  $\sigma$  (すなわち時間增加関数) も収束域に含まれる.

# フーリエ変換で成り立つ性質はラプラス変換でも成り立つ

## 種々の性質 (詳細は応用数学の資料を参考)

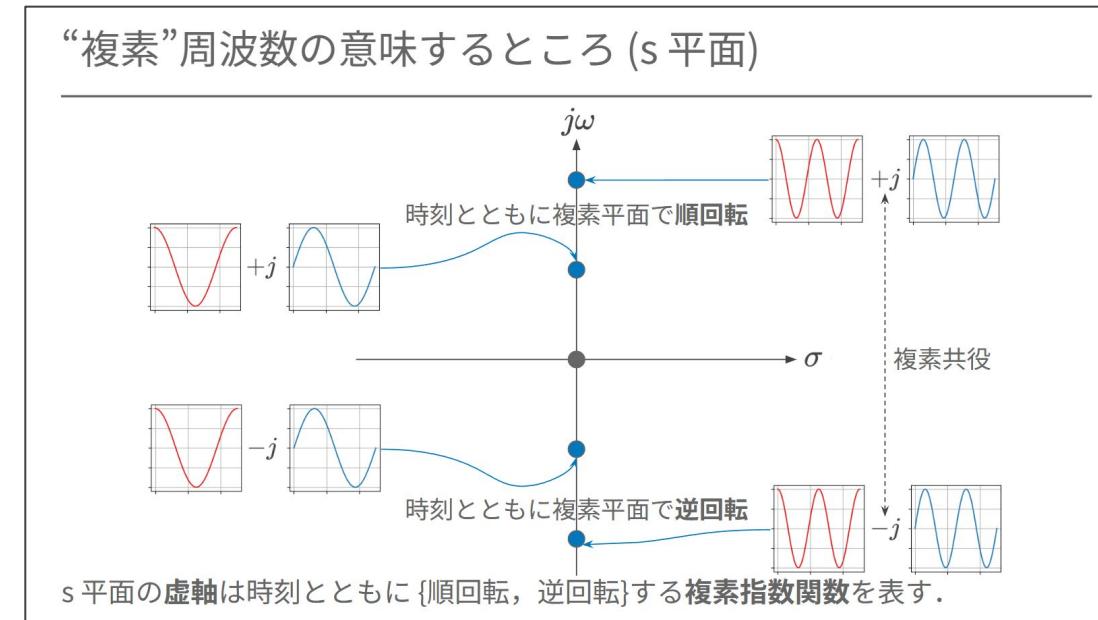
- 線形性
  - “N倍はN倍、和は和のまま”
$$\mathcal{F}[ax(t) + by(t)] = aX(\omega) + bY(\omega)$$
- 相似性
  - “時間が a 倍されると周波数は1/a倍”
$$\mathcal{F}[x(at)] = \frac{1}{|a|} X\left(\frac{\omega}{a}\right)$$
- 時間シフト
  - “時間シフトは周波数領域で exp 項”
$$\mathcal{F}[x(t - a)] = X(\omega)e^{-j\omega a}$$
- 周波数シフト
  - “周波数シフトは時間領域で exp 項”
$$\mathcal{F}^{-1}[X(\omega - a)] = x(t)e^{j\omega a}$$
- 変調定理
  - “余弦波の乗算は周波数の変調”
$$\mathcal{F}[x(t) * 2 \cos(at)] = X(\omega - a) + X(\omega + a)$$
- 微分定理
  - “時間の微分は周波数の乗算”
$$\mathcal{F}\left[\frac{\partial}{\partial t} x(t)\right] = j\omega X(\omega)$$
- パーセバルの定理
  - “フーリエ変換はエネルギーを保存”
$$\int_{-\infty}^{\infty} |x(t)|^2 dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} |X(\omega)|^2 d\omega$$

$$\mathcal{L}[x(t-a)] = X(s) e^{\wedge\{-sa\}}$$

これらの性質は、後述する離散フーリエ変換でも成立する。

# ラプラス変換はフーリエ変換に対応する

- ラプラス変換はフーリエ変換の一般化である
  - 具体的には、増加減衰の波を扱うようになった
- 言い換えれば、増加減衰を扱わない範囲はフーリエ変換に一致
  - すなわち、虚軸はフーリエ変換に一致



# ラプラス変換はフーリエ級数展開にも対応する

- フーリエ級数展開はラプラス変換の特殊化ではない
  - フーリエ級数展開は周期信号, ラプラス変換は非周期信号
- しかし, 周期信号を区間  $[0, \infty]$  でラプラス変換すると対応を見れる.

$$\begin{aligned} X(s) &= \int_0^\infty x(t)e^{-st} dt \\ &\quad \text{周期信号 } x(t+T) = x(t) \qquad \text{積分範囲を分割} \\ &= \int_0^T x(t)e^{-st} dt + \int_T^{2T} x(t)e^{-st} dt + \int_{2T}^{3T} x(t)e^{-st} dt + \dots \\ &= \int_0^T x(t)e^{-st} (1 + e^{-sT} + e^{-2sT} + \dots) dt \\ &\quad \text{変数変換 } t = \tau + T, \\ &\quad dt = d\tau. \text{ 積分範囲 } [0, T] \\ &= \frac{1}{1 - e^{-sT}} \int_0^T x(t)e^{-st} dt \\ &\quad \text{等比級数の和} \end{aligned}$$

フーリエ級数

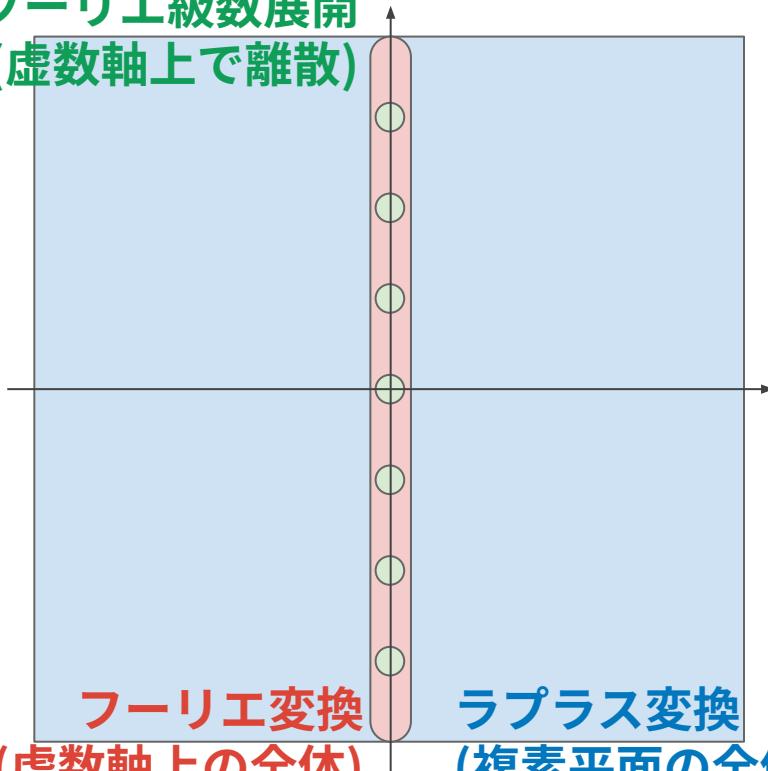
$$c_k = \frac{1}{T} \int_0^T x(t) \exp\left(-j \frac{2\pi k t}{T}\right) dt$$

$s = e^{j2\pi k/T}$  で一致

ラプラス変換を虚数軸上の間隔  $1/T$  の点に限定すると, フーリエ級数展開に対応  
(級数展開可能な関数に限る)

# ラプラス変換とフーリエ{級数展開, 変換}の周波数対応

フーリエ級数展開  
(虚数軸上で離散)



フーリエ変換  
(虚数軸上の全体)

ラプラス変換  
(複素平面の全体)

# 閑話休題：高道研における卒業研究の紹介 (テストには出ない)

三人称ゲーム実況音声に対する時間遅延許容量の測定

松下 嶺佑, 阪井 瞭介, 福田 航希, 高道 慎之介, 井浦 昂太, 斎藤 佑樹, ニュービッグ グラム, 須藤 克仁, 高村 大也, and 石垣 達也

*In* 電子情報通信学会 音声研究会, 2025

BIB

PDF

SLIDES

<https://takamichi-lab.github.io/publications/>

# 研究背景

- ・ スポーツやゲームの試合映像の価値を高めるために、  
実況を自動生成する技術が開発されている [Ishigaki 21] •

入力：実況をつけたい動画

実況自動生成

出力：実況のついた動画



# 実況音声の遅延

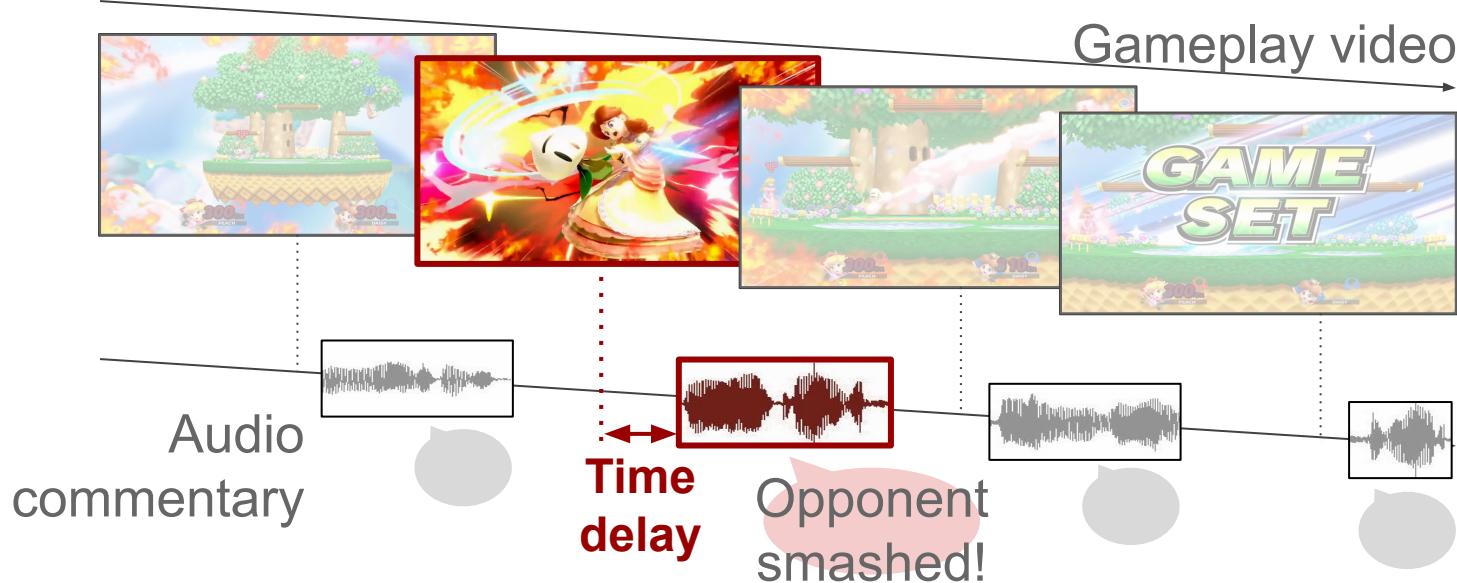
- 一方で、実況を自動生成する場合、動画理解や実況音声の合成に時間を見るため、実況音声に遅延が生じる。
- 自然な実況音声生成のために、**許容される時間**内に遅延を抑えたい。

音声の遅延が大きい例



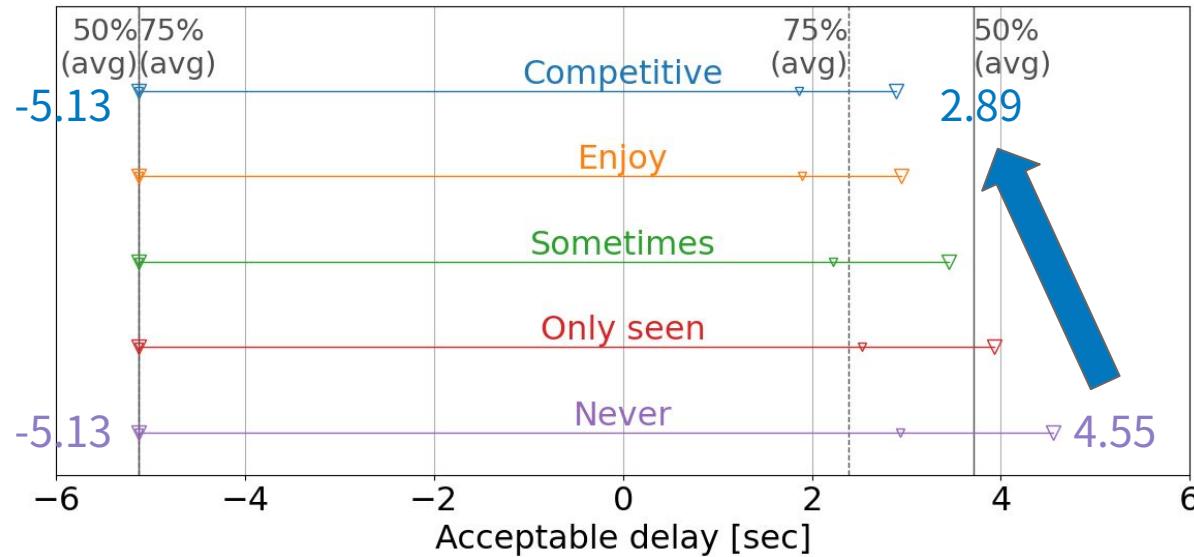
# 本研究の立ち位置

- 大乱闘スマッシュブラザーズSPECIALのプレイ動画を用い、実況の遅延時間について、どれくらい許容できるかを測定する。



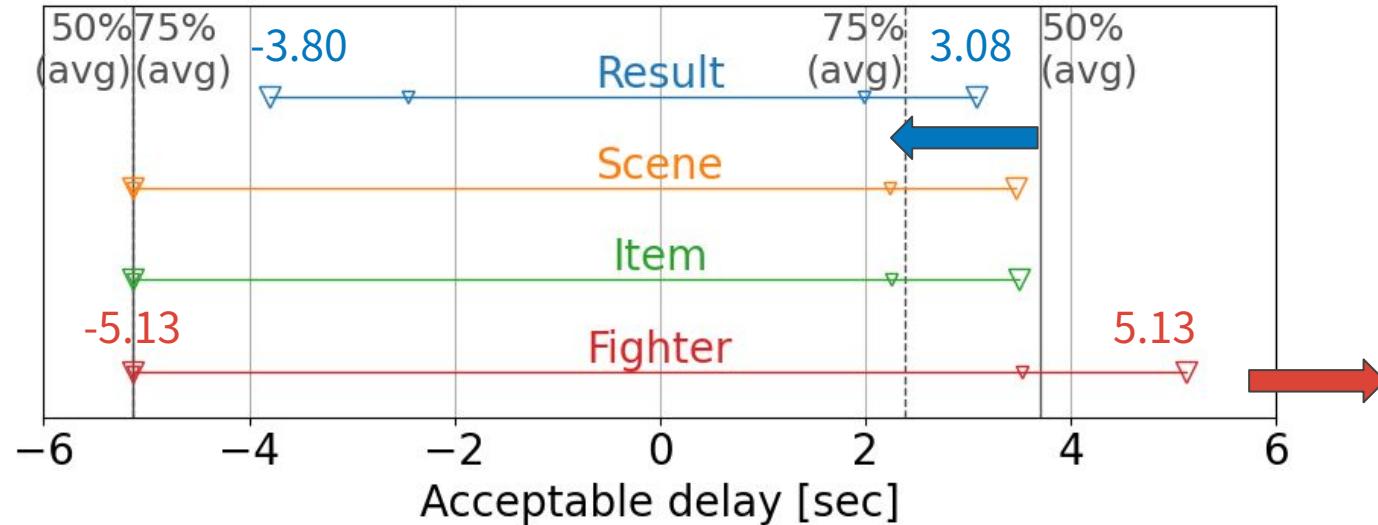
How much delay in commentary is acceptable to viewers?

# 実験結果：ゲームプレイ経験別



- 許容遅延時間はゲームプレイ経験が深くなるほど短い。
  - 経験のある方が反応時間が早くなるという関連研究 [Repp 06] に一致するため、被験者属性による許容遅延時間の差はあると考えられる。
  - 視聴者層に合わせて、実況自動生成をする必要がある。

# 実験結果：トピックタグ



- 許容遅延時間は**Result**では極端に短く、**Fighter**では極端に長い。
  - Resultは、視聴者の関心が向くので、許容遅延時間が短い。
  - Fighterは、内容が予測がしやすいので、許容遅延時間が長い。

# 実際の実況 (Result)

遅延0秒



遅延+1.75秒



- Resultは、遅延時間が大きくなると違和感を覚えやすい。

# 実際の実況 (Fighter)

遅延0秒



遅延+1.75秒



- Fighterは、遅延時間が大きくなっても違和感を覚えにくい。

# z 変換 (z-transformation)

連続時間信号を振動だけでなく増幅・減衰で扱うのがラプラス変換だった。  
じゃあ、その離散時間信号版はあるの？ ある！

# ラプラス変換から z 変換を導出する

$$X(s) = \int_0^\infty x(t) \exp(-st) dt$$

離散時間信号の連続時間信号的表現  
(便宜上等号で結んでいる)

$$= \int_0^\infty \sum_{n=0}^{\infty} x(nT_s) \delta(t - nT_s) \exp(-st) dt$$

積分と総和の順序入れかえ

$$= \sum_{n=0}^{\infty} x(nT_s) \int_0^\infty \delta(t - nT_s) \exp(-st) dt$$

デルタ関数の定義  $\int_{-\infty}^{\infty} \varphi(t) \delta(t) dt = \varphi(0)$

$$= \sum_{n=0}^{\infty} x(nT_s) \exp(-nsT_s)$$

$$= \sum_{n=0}^{\infty} x[n] (\exp(sT_s))^{-n}$$

= z (複素数) と定義する → z 変換

# z変換の定義

- z 変換 : 離散時間信号 → 複素周波数

$$X(z) = \sum_{n=0}^{\infty} x[n]z^{-n}$$

$$\mathcal{Z}[x[n]] = X(z)$$

- 逆z 変換 : 複素周波数 → 離散時間信号

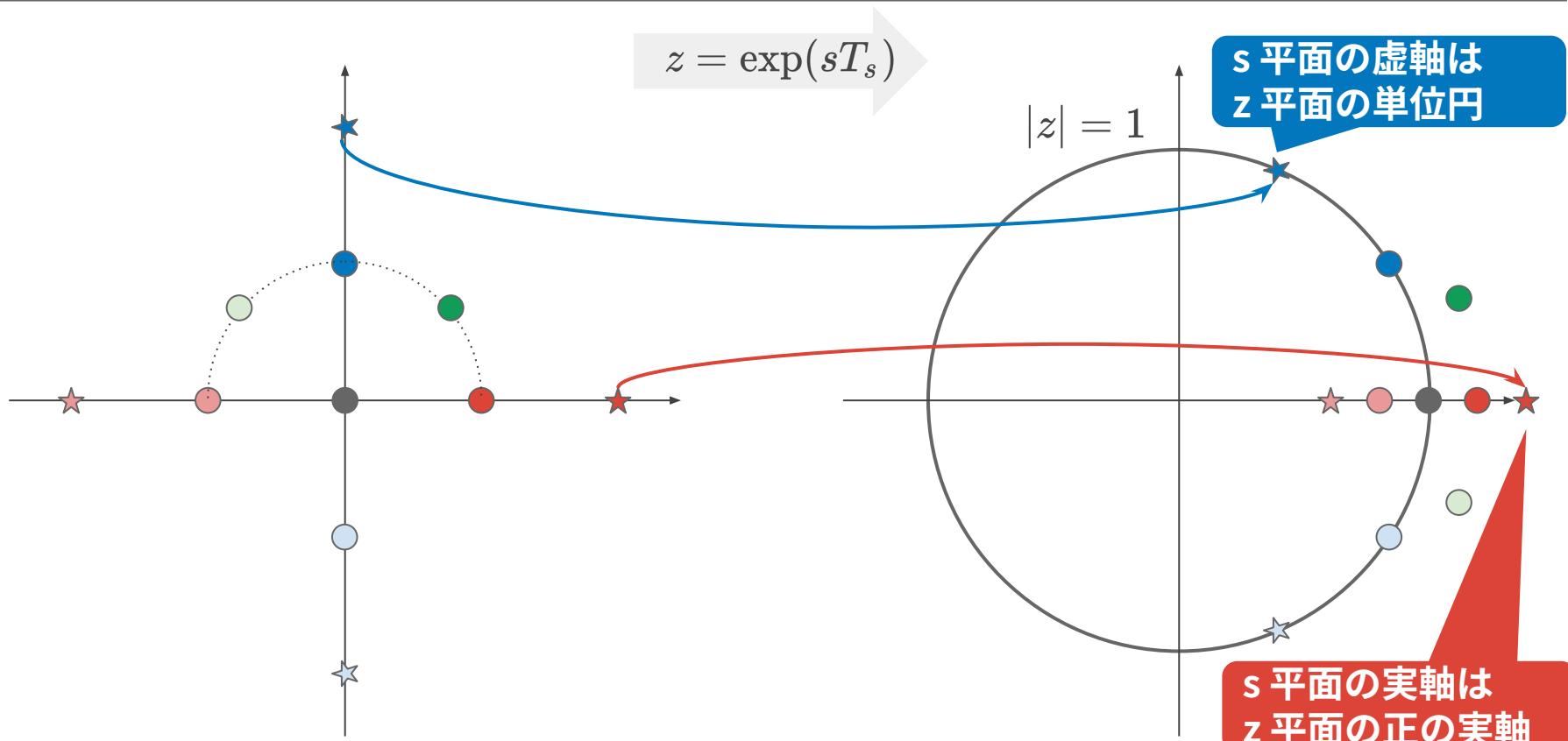
$$x[n] = \frac{1}{2\pi j} \int_{\mathcal{C}} X(z)z^{n-1} dz$$

$$\mathcal{Z}^{-1}[X(z)] = x[n]$$

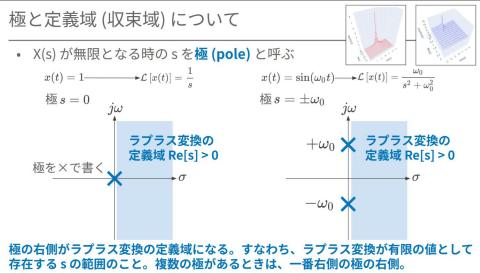
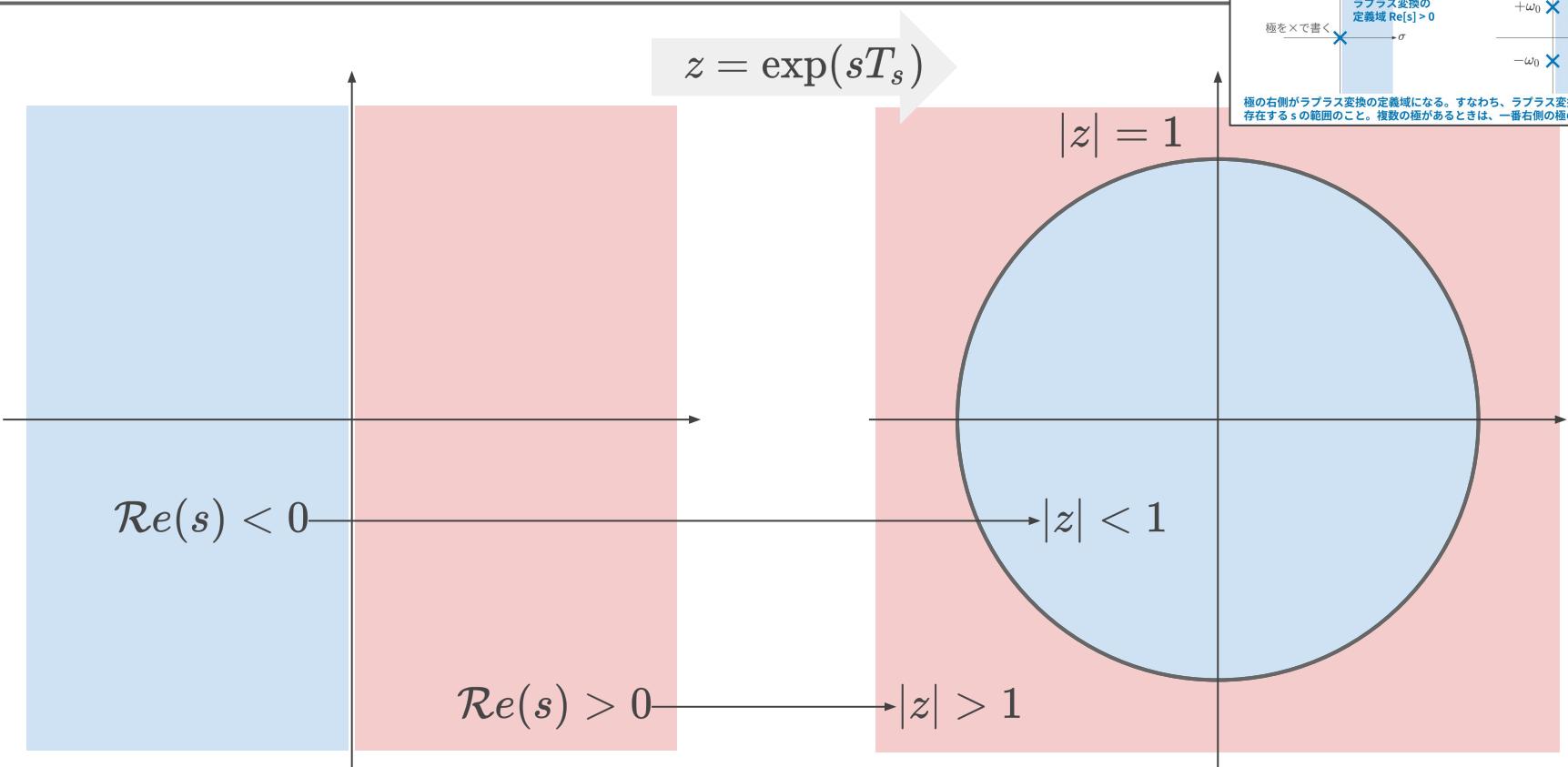
端的に言うなら…

- z 変換は、ラプラス変換の離散時間信号版
- ラプラス変換と同様に、信号の増減を表現できる

# $s$ 平面と $z$ 平面の対応



# $s$ 平面と $z$ 平面の対応



# z 変換してみよう

---

- 単位パルス信号

$$x[n] = \delta[n] \xrightarrow{\text{基本形は } 1} \mathcal{Z}[x[n]] = 1$$

- 有限長の信号

$$x[n] = 4\delta[n] + 2\delta[n - 1] + \delta[n - 2] \xrightarrow{z^{-1}} \mathcal{Z}[x[n]] = 4 + 2z^{-1} + z^{-2}$$

- ステップ信号

$$x[n] = u[n] \xrightarrow{1/(1-z^{-1})} \mathcal{Z}[x[n]] = 1 + z^{-1} + z^{-2} + \dots = \frac{1}{1 - z^{-1}}$$

- 等比数列信号

$$x[n] = a^n \xrightarrow{1/(1-az^{-1})} \mathcal{Z}[x[n]] = 1 + az^{-1} + a^2z^{-2} + \dots = \frac{1}{1 - az^{-1}}$$

- 等差数列信号

$$x[n] = n \xrightarrow{} \mathcal{Z}[x[n]] = \frac{z^{-1}}{(1 - z^{-1})^2}$$

# 逆変換も可能

- 例えば

$$X(z) = \frac{7z^2 - 10z}{z^2 - 3z + 2}$$

$$X(z) = \frac{7 - 10z^{-1}}{1 - 3z^{-1} + 2z^{-2}}$$

$$X(z) = \frac{7 - 10z^{-1}}{(1 - 1z^{-1})(1 - 2z^{-1})}$$

$$X(z) = 3 \frac{1}{1 - z^{-1}} + 4 \frac{1}{1 - 2z^{-1}}$$

$$x[n] = 3u[n] + 4 \cdot 2^n$$

z 変換してみよう

- 単位パルス信号

$$x[n] = \delta[n] \xrightarrow{\text{基本形は } 1} \mathcal{Z}[x[n]] = 1$$

- 有限長の信号

単位遅れは

$$x[n] = 4\delta[n] + 2\delta[n-1] + \delta[n-2] \xrightarrow{z^{-1}} \mathcal{Z}[x[n]] = 4 + 2z^{-1} + z^{-2}$$

- ステップ信号

1ずつ乗算されると

$$x[n] = u[n] \xrightarrow{1/(1-z^{-1})} \mathcal{Z}[x[n]] = 1 + z^{-1} + z^{-2} + \dots = \frac{1}{1 - z^{-1}}$$

- 等比数列信号

aずつ乗算されると

$$x[n] = a^n \xrightarrow{1/(1-az^{-1})} \mathcal{Z}[x[n]] = 1 + az^{-1} + a^2z^{-2} + \dots = \frac{1}{1 - az^{-1}}$$

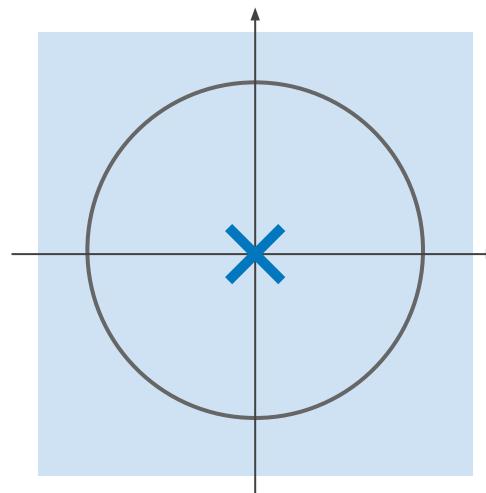
- 等差数列信号

$$x[n] = n \xrightarrow{\frac{z^{-1}}{(1 - z^{-1})^2}} \mathcal{Z}[x[n]] = \frac{z^{-1}}{(1 - z^{-1})^2}$$

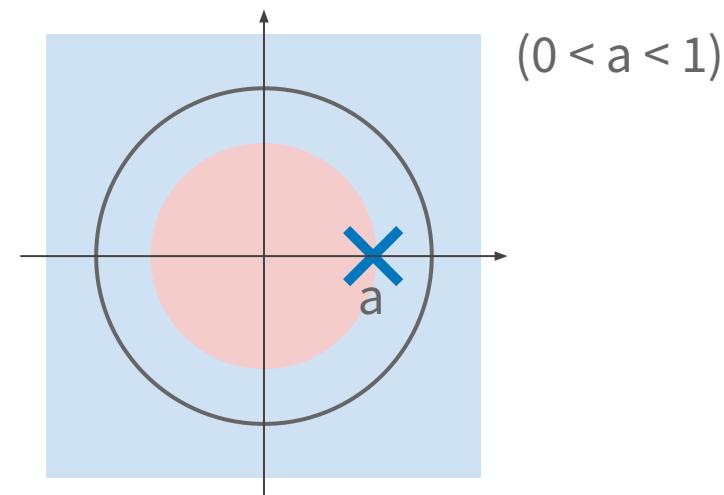
極と定義域(収束域)について：  
 $X(z)$ が無限大に発散する  $z$  が極になる。

---

$$\mathcal{Z}[x[n]] = \frac{1}{1 - z^{-1}}$$



$$\mathcal{Z}[x[n]] = \frac{1}{1 - az^{-1}}$$



極の絶対値の外側が  $z$  変換の定義域になる。すなわち、 $z$  変換が有限の値として存在する  $z$  の範囲のこと。複数の極があるときは、一番外側の極の外側。

# 離散フーリエ変換との関係

- $z$  変換も離散フーリエ変換に対応する

$$X(z) = \sum_{n=0}^{\infty} x[n]z^{-n}$$

- 上式で  $z = e^{j\omega}$  にする

- → すなわち単位円上だけを考えると **離散時間フーリエ変換**

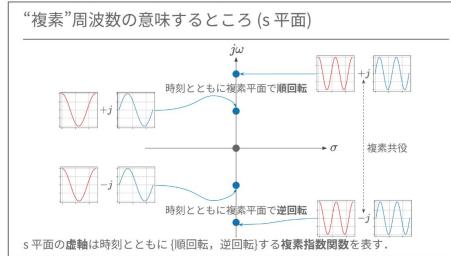
$$X(\omega) = \sum_{n=0}^{\infty} x[n]e^{-j\omega n}$$

- さらに,  $\omega = 2\pi k / N$  で離散化して区間を限定する
  - → すなわち, 単位円上を  $N$  等分割すると **離散フーリエ変換**

$$X[k] = \sum_{n=0}^{N-1} x[n]e^{-j\frac{2\pi kn}{N}}$$

ラプラス変換はフーリエ変換に対応する

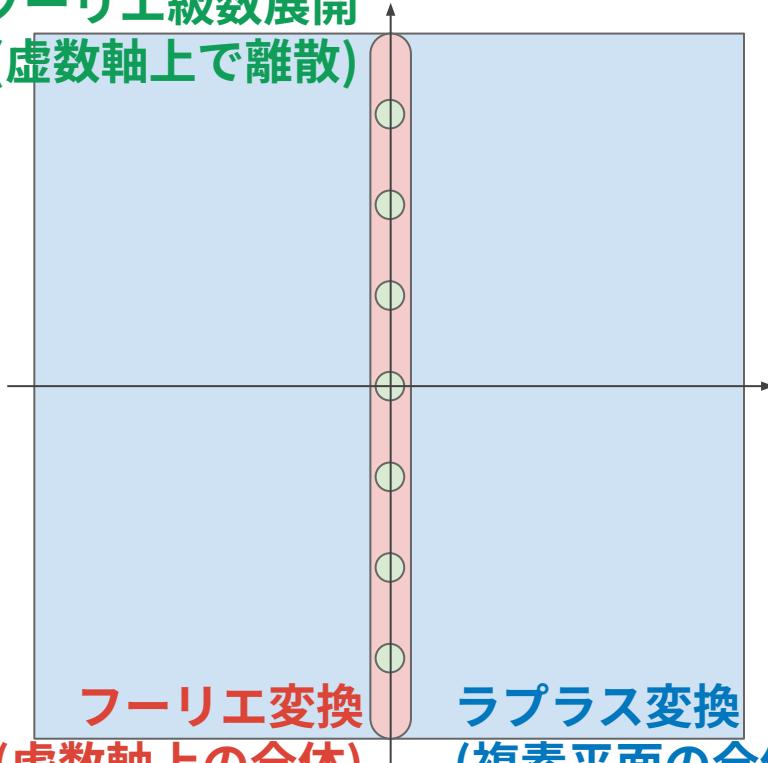
- ラプラス変換はフーリエ変換の一般化である
  - 具体的には, 増加減衰の波を扱うようになった
- 言い換えれば, 増加減衰を扱わない範囲はフーリエ変換に一致
  - すなわち, 虚軸はフーリエ変換に一致



34

# 離散フーリエ変換との関係

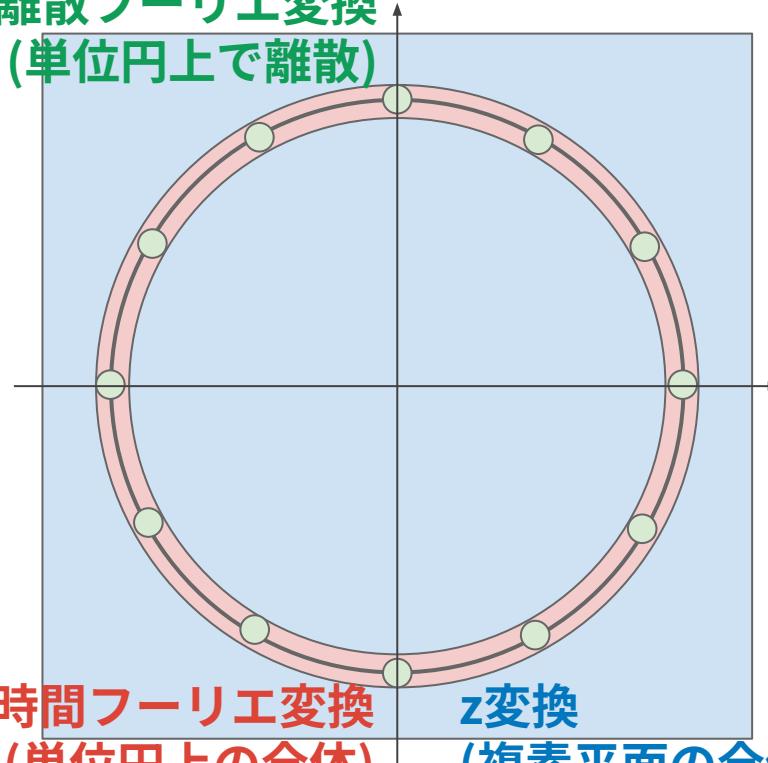
フーリエ級数展開  
(虚数軸上で離散)



フーリエ変換  
(虚数軸上の全体)

ラプラス変換  
(複素平面の全体)

離散フーリエ変換  
(単位円上で離散)



離散時間フーリエ変換  
(単位円上の全体)

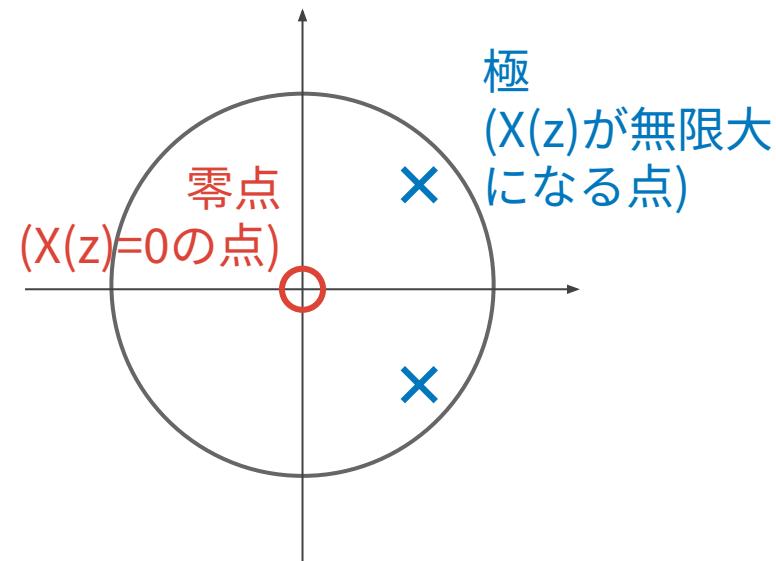
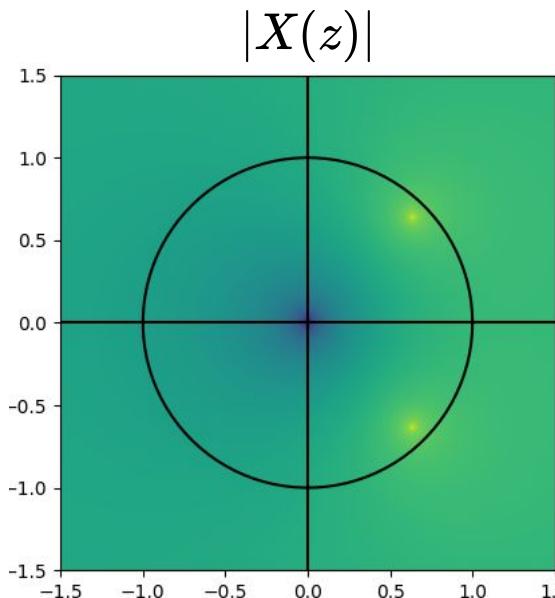
z変換  
(複素平面の全体)

# $z$ 変換の絶対値 $|X(z)|$

$$X(z) = \frac{1}{(1 - 0.9e^{j\pi/4}z^{-1})(1 - 0.9e^{-j\pi/4}z^{-1})}$$

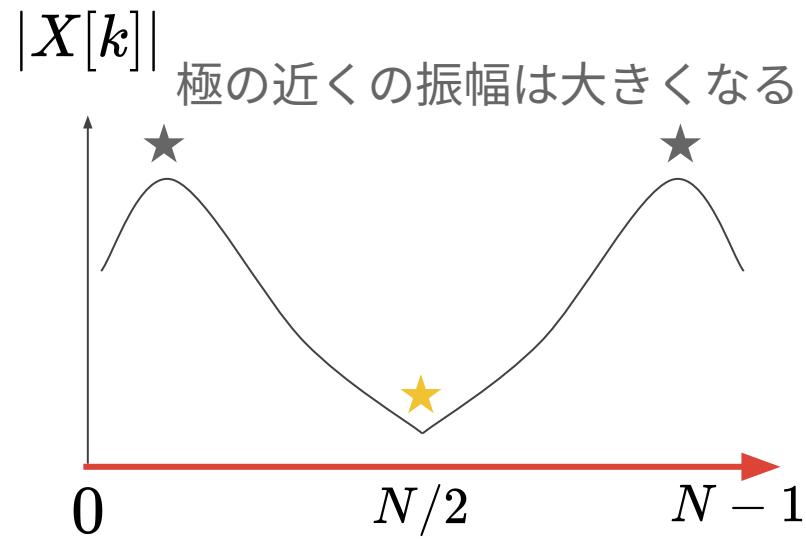
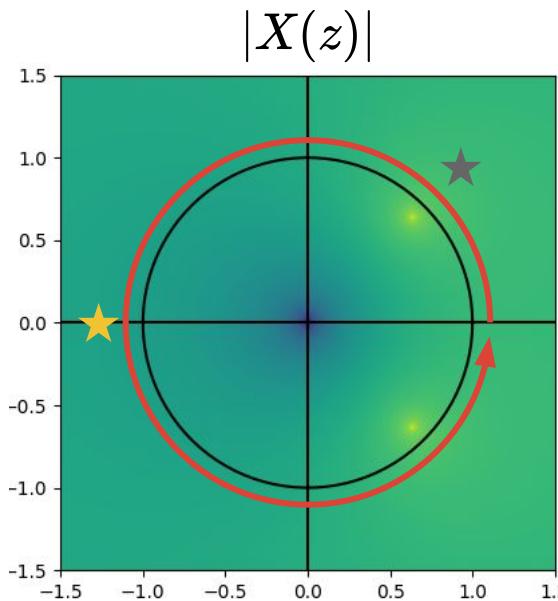
$|X(z)|$  の解析解の導出手順は概略.

- 分母と分子に  $z^2$  を乗算する.
- $z = a + jb$  と置く.
- 分母と分子に、分母の複素共役を乗算して分母を実数にする



実数信号を扱う場合、極（と零点）は実軸で線対称になる

$z$ 変換の振幅がわかれれば、離散フーリエ変換の振幅スペクトルの概形がわかる



{離散時間, 離散}フーリエ変換の振幅スペクトルは単位円上の絶対値に等しい

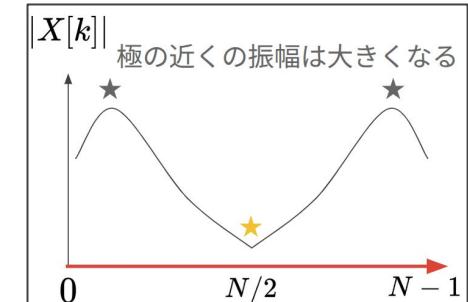
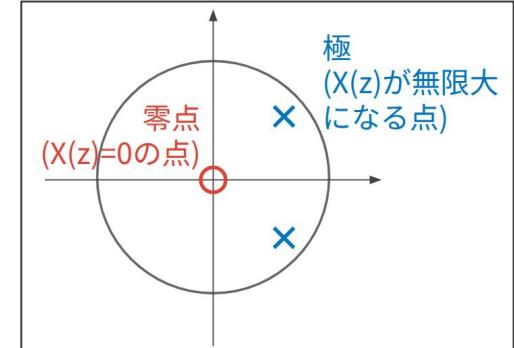
# 演習 (残りは課題)

- 次の離散時間信号について
  - $z$  変換を求めよ.
  - 極の位置を描画せよ.
  - 収束域を答えよ.
  - 極の位置から、離散フーリエ変換の振幅スペクトルの概形を描画せよ.

$$x[n] = \sum_{k=0}^{\infty} \left(\frac{1}{2^8}\right)^k \delta[n - 8k]$$

(8サンプルごとに非零の値になり  
値が  $1/2^8$  ずつ小さくなる等比数列)

- ヒント
  - 等比数列の形 ( $\bigcirc^k$ ) の形に変形する.
  - 極は実数解だけではない. 複素解析の授業を思い出すこと.
  - 収束域は、最も外側にある極の外側.



# 時間領域の畳み込み演算は z 領域で乗算になる (これはフーリエ変換, ラプラス変換でも共通する)

$$\mathcal{Z}[h[n] * x[n]] = H(z)X(z)$$

$x = [1, 3, 2]$ ,  $h = [2, 2, 3]$  とする. 畳み込み結果  $y[n]$  を求めよ.

$h[n]$	2	-2	3		
$x[n]$	1	3	2		
$x[n-0]$					
$x[n-1]$					
$x[n-2]$					
$h[0]x[n-0]$					
$h[1]x[n-1]$					
$h[2]x[n-2]$					
$y[n]$					

計算手順:

- 左側の列に  $x[n]$  の値を並べる。
- 右側の列に  $h[n]$  の値を並べる。
- 各列の要素を掛け合わせて、各列ごとに足し合わせる。

結果:

$$y[n] = h[0]x[n-0] + h[1]x[n-1] + h[2]x[n-2]$$

$$H(z)$$

$$X(z)$$

$$X(z)z^{-0}$$

$$X(z)z^{-1}$$

$$X(z)z^{-2}$$

$$h[0]X(z)z^{-0}$$

$$h[1]X(z)z^{-1}$$

$$h[2]X(z)z^{-2}$$

$$(h[0]z^{-0} + h[1]z^{-1} + h[2]z^{-2})X(z)$$

$$H(z)$$

# まとめ (matome)

# まとめ

---

- ラプラス変換
  - ラプラス変換は、時間減衰関数を導入することで、フーリエ変換できなかつた信号も変換できるようにしたもの
  - フーリエ変換で使われる振動だけでなく、信号の増減も表せるもの
  - 減衰関数の強さで信号の増減を解析できるもの
- z変換
  - z変換は、ラプラス変換の離散時間信号版
  - ラプラス変換と同様に、信号の増減を表現できる

# 課題 (exercise)

# 以下の課題についてレポートを作成し、 LMS 上で提出せよ。

## 演習 (残りは課題)

- 以下の関数について  $X(s)$  の実部・虚部をプロットし、その形状を比較・考察せよ。  $a, \omega_0$  には適当な値を使用せよ。
  - ステップ関数 ← 前のページのやつ
  - 指数関数 ( $a > 0$ )
  - 正弦波関数 ( $\omega_0 > 0$ )
- sympy の関数
  - numpy と同じように定義されているケースが多い
  - `sp.exp()`, `sp.sin()`, `sp.pi`
- プロットする  $s$  の範囲を適宜変更せよ。

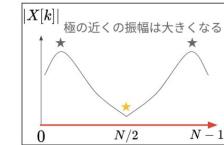
## 演習 (残りは課題)

- 次の離散時間信号について
  - $z$  変換を求めよ。
  - 極の位置を描画せよ。
  - 収束域を答えよ。
  - 極の位置から、離散フーリエ変換の振幅スペクトルの概形を描画せよ。

$$x[n] = \sum_{k=0}^{\infty} \left(\frac{1}{2^k}\right)^k \delta[n - 8k]$$

(8サンプルごとに非零の値になり  
値が  $1/2^8$  ずつ小さくなる等比数列)

- ヒント
  - 等比数列の形 ( $\bigcirc^k$ ) の形に変形する。
  - 極は実数解だけでない。複素解析の授業を思い出すこと。
  - 収束域は、最も外側にある極の外側。



29

56